

## 研究ノート

## 表象の発達：情動的關係性との関連

金丸 智美\*

## はじめに

私たちヒトと他の動物とを分ける、心の働きの代表的なものが、目の前にないことを思い描くという「表象」機能である。表象をもとに、言葉を使い、思考し、想像し、新しいものを創り出すことで、人類は複雑な社会や多様な文化を築いてきたともいえる。

表象がなぜヒトに備わっているのか、あるいは、成長過程の中でどのように発生するのかということは、人間の心の独自性を追究する上で、心理学や哲学の重要な主題であり続けている。

発達心理学において表象は、ピアジェ（Piaget, J.）に代表される認知発達に関する理論で主に取り上げられてきた。彼の理論では、感覚運動期と呼ばれる最初の段階から、子どもが周囲の対象物に働きかける「運動」によって、認知は発達するとされる。表象も、その過程の中で、感覚運動期の終わり頃の1歳後半に形成される。つまりピアジェは、表象を生得的に近い形で備わるものではなく、子どもの経験によって後成的に作られるものと捉えたのである。

一方で1980年代以降にベイラージョンら（Baillargeon & Graber, 1987）に代表される研究者たちは、乳児の視覚実験の結果をもとに、ピアジェが唱えた時期よりも早い、生後4～5か月頃に表象機能を備えていると主張した。つまり彼らは表象を、ピアジェが主張するように、運動という経験を経て形成されるものではなく、発達のかなり早期から既に存在するものと考えたのである。

ピアジェやベイラージョンが研究の焦点とした表象の内容は、対象物である。しかし、表象内容には、対象物以外にも、人物や、自分自身や他者の心の状態、さらには自己感なども含まれる。

人物に関する表象については、発達の早期から存在することが複数の研究知見から想定される。例えば、still face実験では、生後数か月の乳児も、普段どおりにやり取りをしていた

\*総合福祉学部 准教授

母親が突然無表情になると、視線をそらせたり、ぐずったりするなどのネガティブな反応を示す (Bertin & Striano, 2006)。この実験からは、生後数か月の乳児も、母親との通常の関わり合いについての何らかの表象を持っていることが想定される。さらには、新生児が、母親の顔と他の女性の顔を並べて見せられると、母親の顔のほうをより長く見るという現象 (Bushnell, 2001) から、誕生間もない頃から既に母親の顔についての表象的なものを持っている可能性が示唆される。

このように、ベイラー・ジョンらの実験や still face 実験などの結果からは、表象機能は、生得的とはいえないまでも、かなり発達早期から存在することが想定される。

そうであるならば、表象機能は、発達の過程の中で、乳児という主体だけで、より高次なものに作り上げるものなのであろうか。ピアジェは、子どもたちの行動の詳細な観察によって、主体と環境との相互作用の中で、認知発達が行われることを見出したわけだが、環境としての他者が、認知発達にどのように影響するのかという視点は見えてこない。また、認知機能に特権的な地位を置き、認知が、自己感や情動や関係性など他の領域と、どのように関連し合いながら変化するのかの考察はほとんどない。ピアジェの理論に対して、このような批判を行った代表的な研究者がワロン (Wallon, H.) である。また、乳児が誕生以降、言語を持つまでに、他者との情動的やり取りを含む関係性の中で、どのように自己感という一種の表象を形成するのかを詳細に記述したのがスターン (Stern, D. N.) である。

本稿では、表象の定義および表象発生に言及している理論を整理し、他者との関係性や情動と影響し合いながら表象が発達することを考察する。

## I. 表象とは何か

表象が、誕生後のいつ頃から形成されるのかという議論を行うためには、表象の定義や種類を明らかにする必要がある。

表象とは、広辞苑 (第7版) によれば「対象が意識に現れること」である。表象の英語での表記は「representation」であり、分解すると「re-presentation」となる。すなわち、今、ここにはない対象を再び心的に蘇らせることである。加藤 (2007) は、外的刺激によって自動的に「蘇る」のではなく、想起する主体が自発的に意図を持って「蘇らせる」ことが前提となると強調している。知覚が、目の前の対象物に主体を拘束するのに対し、表象は外的世界からは独立して操作可能であり、主体の自由になる道具ともいえる (加藤, 2007)。表象を使うことで、現実とは異なる世界を作ることができる。

また、同じ論考の中で加藤 (2007) は、人間特有の表象とは「置き換え」という様式であり、単なる記憶痕跡とは異なるとする。つまり、対象や出来事を、それが経験される場所や時間と切り離して、別の心的なものに置き換えて保持できるようになることが表象作用なの

である。

「心の理論」の研究において、パーナー（Perner）は、表象の種類やその発達段階を次の3つの水準に整理している（子安，1997）。1歳半頃までの子どもに可能なのは、現実の状況のみを表す一次表象であり、ものの見方も単純更新モデルである。まだこの時期には、過去の表象と現在の表象とを同時に持つことはできず、過去の表象は現在の表象によって更新されてしまう。例えば、それまでに遊んでいた玩具を布などで隠されると、もうそこには玩具は存在しないかのように振る舞うという、対象の永続性理解以前の子どもの行動は、現実の玩具の表象は消え、「今、ここにはない」との表象に更新されたためと理解できる。それが、次の2歳から4歳にかけては、二次表象の段階となり、ものの見方は多重モデルとなる。例えば、現実のものの表象と、絵として描かれたものの表象とを同時に持つことができるようになる。そのため、この時期に「ふり」や「ごっこ」が現れるようになる。さらに4歳以降には、他者の持つ表象についての表象、つまりメタ表象を理解できるようになる。この時期以降に、子どもは、他者の持つ、現実と一致した表象だけではなく、現実とは異なる表象（誤った信念）も理解できるのである。

前述の加藤（2007）が指摘する、人間特有の表象である「置き換え」という様式は、パーナーの表象の3水準の中の二次表象に該当する。二次表象やメタ表象が可能になることによって、子どもの姿は、ごっこ遊びをはじめ、言葉の出現や他者の心の理解など、著しい変化を遂げていくのである。

## Ⅱ. 表象の発生：ピアジェとワロンの捉え方

ピアジェとワロンは同時代を生きた、同じフランス語圏の発達心理学者として対比されることも多く、互いの理論を批判し合ったことは「ピアジェーワロン論争」としても知られている。その中でも特に、表象の発生は重要な論点であった。

ピアジェの認知発達の理論（1936）では、主体が環境と相互に作用し合う中で、主体が環境にどのように適応していくかが考えの中心にある。人が新しい情報を取り入れる際に、認知的枠組み（スキーマ）に合わせるように取り入れること（同化）と、スキーマ自体を変えて取り入れること（調節）を繰り返しながら、認知を発達させていく。乳児期以降の認知発達を、感覚運動期から、知的能力の完成としての形式的操作期までの4つの段階に分け、行為や運動が、心的表象を使いながら論理的に思考する「操作」へと、どのように高次化していくかを記述している。

中でも、新生児の反射から始まる最初の感覚運動期については、表象が形成されるまでの過程を6段階に分け、詳細にその特徴を記述している。第1段階の反射の時期以降、自身の身体や周囲の対象物への行為を反復する（循環反応）時期（第2段階、第3段階）を経て、

生後10か月頃には乳児の意図性が現れるようになる(第4段階)。ピアジェは、この時期に、対象の永続性理解が可能になることから、表象能力の萌芽とした。さらに満1歳頃(第5段階)の、試行錯誤的に外界の事物に働きかけ、偶然に発見した結果を反復する時期を経て、1歳半から2歳頃の第6段階、つまり心的結合による新しい手段の発明の時期に至り、心的表象が現れる。この時期には、新しい事象に出会った際に、既存のシエマを使うことで問題解決が可能になる。

このようにピアジェは、主体と環境との相互作用の中で運動的シエマが次第に協応し合うようになり、それが心的に内化されることによって、表象が形成されると考えたのである。

一方のワロンの表象発生に関する考え方については、加藤(2007)が10個の命題としてまとめている論考を参考に以下のように整理されるだろう。ワロンは、ピアジェの考えのように、主体が外界に働きかけるという行為や運動の延長の上に表象が発生するのではなく、表象の発生には、まず姿勢機能の働きが重要であるとしている。ここでの姿勢は、行為の前に何らかの筋緊張を伴う自己塑型的な働きである。つまり表象は、主体が活動を行う前に一旦踏みとどまり、自身と外界との間に時間的、空間的な間を作ることで発生するのである。さらに、ワロンは、表象内容や表象媒体は、個人が自力で作りに上げるのではなく、人と人との関係の中から生み出されると、社会的関係性の役割を指摘している。

ワロンの指摘する、筋緊張を伴う姿勢と、社会的関係性とのつながりを理解することは容易ではないが、この間をつなぐものが情動であると考えられる。ワロン(1938)は、情動も、筋緊張や内受容感覚を伴い、身体内部に何らかの変化を生み出す機能を持つという点で姿勢と共通しているとし、情動のもつ主体に対する役割を重視する。情動と姿勢は、人々の間で伝播しやすく、それゆえに人同士のつながりを強める働きをする。

ピアジェとワロンの論争では、ワロンがピアジェを批判し、ピアジェは守勢的に反論するというやり取りが多かったとされる(足立, 1996)。表象の発生については、両者とも、表象が生得的に備わるとするのではなく、子どもの経験によって後成的に形成されると捉える点は共通している。しかしワロンは、まず、ピアジェが運動的水準と心的水準を連続的に捉えていることを批判する。つまり、ピアジェの記述は、表象出現に至るまでの変化の記述であって、運動的シエマと、心的シエマである表象が、どのように分化するかについては説明していないという指摘である(加藤, 1996)。さらにワロンは、ピアジェの理論を「個体主義」と名づけ、主体を関係から切り離し、閉じた存在として捉えていると批判している。ワロンは、姿勢や情動に媒介される他者との関係性を重視し、そこからどのように表象が切り出されるのかを問題にしたといえる(加藤, 1996)。

### Ⅲ. 乳児の自己感形成における表象と情動：スターンの理論

スターン（1985）は、言語を使用するようになるまでの乳児が、どのような主観的な世界に生きているのか、どのように自分や他者を体験するのかについて、発達心理学における1970年代以降の研究知見と、臨床心理学の知見を統合させる形で理論化している。そこでは、前言語期の乳児の自己感が、他者との関わりや、情動と関連し合いながら作られていく過程が描かれている。具体的には、誕生後の2か月までの新生自己感、生後2～6か月の中核自己感、生後7～15か月の主観的自己感、それ以降の言語的自己感およびナラティブ自己感である。ここでは、言語的自己感より以前の3つの自己感における、表象と情動との関わりを中心に取り上げる。

新生自己感は、自己感というまとまりが現れつつある「過程」である。乳児の新生されつつある自己感に作用するのは、異なる知覚様式で受けた情報を、別の知覚様式へ変換するという、生得的に備わる無様式知覚である。例えば、母親の声を聞く体験と、母親が話す口の形を見る体験とを結びつけることで、「話す母親」という、まとまりを持った体験として乳児に知覚される。このような無様式知覚が乳児に可能なのは、繰り返す同じ体験を繰り返すことによる学習ではなく、生得的に無様式の表象があり、そこに異なる様式の表象が書き込まれるためとスターンは説明する。この無様式知覚によって、自己や他者に関する多様な体験を統合することが可能になるが、さらに、それを助けるのが、一種の「ほとぼしり」や「爆発性」と喩えられる活性化輪郭を備えた「生氣情動」である。多様な他者からの働きかけや、乳児自身の内的経験であっても、その「ほとぼしり」が類似することで、あるまとまった知覚として体験できる。

次の中核自己感の時期になると、より自己感がはっきりとしてくる。自分の行為や身体や情動をまとまりのある、時間的に連続したものとして捉える感覚をもとに、自己感を作っていく。この頃には乳児から、周囲の人たちに向けて微笑みかけたり、声を出したりする行動が増す。それに伴い、周囲の人たちも、その人独自のさまざまな情動的トーンによって乳児に働きかける。このような社会的交流の中で、乳児の中には「お母さんは、いつも、こんな声のトーンで話しかけてくれる」「お父さんは、いつも、こんな力の入れ具合で抱いてくれる」など、他者についてのイメージ（中核他者感）が作られる。スターンは、他者との交流の中でのエピソードを抽象化し、平均化された表象を「一般化された相互交流に関する表象」（RIGs）と名づけている。

またスターンは、この時期の養育者が、乳児に対して、モノを擬人化させて示す働きかけをすることを指摘している。例えば、養育者が玩具を、あたかも命を持つものであるかのように、見せ、動かし、触らせることによって、乳児の玩具への興味は高まるのである。

次の、生後7か月以降の主観的自己感の時期を、スターンは「一足飛び的な成長」として

いる。それは、乳児が、自分にも他者にも意図や情動があることに気づき始め、他者と意図や情動を共有する、間主観的かかわり合いを始めるためである。また、養育者は、意図や情動を持つ相手として、乳児への関わりを変化させる。例えば、乳児の動きや声などに、養育者自身の声や動きのトーンを合せるという「情動調律」を養育者が無意識に行うことが増える。この情動調律によって、乳児は、養育者に自身の情動を理解してもらった感覚を得ることになる。この情動調律について、スターンは、行動を非言語的なやり方によって矯正するものとし、単に行動を真似る模倣とは異なることを強調し、象徴を使用する言語的自己感へ進むうえで欠かせない重要なものと捉えている。

以上のようにスターンは、誕生後間もない発達早期から乳児が、無様式知覚という表象様式を備え、他者とは異なる、身体や情動を持つ存在としての自己の感覚を持つことを前提にし、養育者に代表される他者との情動的な交流の中で、その自己感を発達させると捉えているのである。

#### IV. 見ることと表象

表象が形成されるためには、外界の事物や人物を、知覚によって取り入れる必要がある。知覚の中でも特に視覚が表象形成においては重要とされる。

脳科学の観点からは、乳児が相手の目を見ている時、すなわちアイコンタクトをしている時には、前頭前野の活動が亢進していることが明らかにされている(浦川他, 2011)。また、生後1歳半頃に、前頭葉の髄鞘化が進むことによって、この領域で情報伝達の速さが増すことが明らかにされ、この変化は表象機能の発達の神経基盤と考えられている(相原, 2016)。このように、乳児が他者と見つめ合うことで、表象機能に関わると想定される前頭葉の発達が進むとすれば、脳科学の観点からも、表象形成にとって視覚が重要といえるであろう。

スピッツ (Spitz, R. A., 1972) によれば、視覚は、味覚、嗅覚、触覚と異なり、心の中に時間・空間の連続体を作り上げることで、対象についてのまとまりをもった表象をつくることを助ける。乳児が抱かれて母乳を飲む時にじっと母親の顔を見つめることで、母親の表象を作り、乳を与えられていない時にも母親や乳首は存在することを理解するようになる。子どもは自分の傍にいる母親も、自分から遠ざかっていく母親も、見ることによって、一つのまとまりをもった対象としての表象を形作っていく。生後3か月頃に生じる、周囲の人々から働きかけられると微笑みを返す社会的微笑も、生後8か月頃に顕著になる、見知らない人物への不安も、乳児の視覚を入り口として現れる現象である。

このような、表象形成の上で視覚の役割を重視するスピッツの考えは、ウェルナーとカプラン (Werner & Kaplan, 1963) がシンボル形成の上で重視する「事物を静観すること」と重なる。彼らは、生後4か月頃になると、それ以前の時期のように、物を掴んですぐに口に入

れるのではなく、掴んだ物を注視する行動が現れるとしている。対象物を静観するためには、姿勢を対象物に向けることが必要となる。この点は、前述したワロンの、活動に移す前に一旦踏みとどまることが表象発生に必要とする考えとも一致する。

このように、対象物を見ることが表象形成の上で重要であるならば、その事物を他者と共に見ることで、表象内容をより洗練化させることができるであろう。子どもが他者と、同じ事物を見るという共同注視が、生後9か月頃には、その事物への情動や、その意味を共有する共同注意へと発展していく。そのような変化も、子どもが一人だけで成し遂げるのではない。常田（2007）は、乳児が生後2か月から9か月の時期における一組の母子の対面相互交渉場面の縦断観察により、共同注視から共同注意へと変化していく過程を記述している。まず「顔を見る、見せる」関係から、母親による全面的な調整によって共同注視が成立する段階、さらには母子がお互いの動きに協働して注意を向け合うことで共同注視が成立し、そこからさらに、二者間で情動を共有するという共同注意へと達する過程を明らかにしている。また、注意に関する母親の支持的行動は、子どもの姿勢運動能力の発達に応じて変化していることも示されている。

対象物を見ることも、養育者との関係の中でより洗練化され、その意味や付随する情動や意図を共有することへと発展するといえる。

## V. 模倣と表象

子どもは、周囲の人たちの動作などを真似ること、つまり模倣によって、さまざまなことを学ぶ。他者の動作などをすぐに真似るのではなく、時間が経ってから真似る延滞模倣をするためには、他者の動作についての表象が必要である。ピアジェは、この延滞模倣の出現は、感覚運動期期の終わりの第6段階に現れ、これを心的表象の形成とみなし、その内化が、思考による表象になると捉えた。このように、ピアジェは模倣を、認知発達の観点から捉えたものの、乳児の動機づけや情動との関連については言及していない。

しかし子どもは、誰の動作であっても模倣するのだろうか。模倣の対象となる人物の多くは、身近にいる養育者、きょうだい、保育者などである。ウェルナーとカプラン（1963）は、生後1年目の後半に、両親などの特定の人物の行動だけを真似をする「感情移入的動作」の時期があり、それ以降の、例えば大きな柱時計の振り子などの無生物の動きも含めて真似をする時期までの、過渡的なものとして子どもの姿を描写している。また、スピッツ（1972）は、生後2年目前半の男児が、週末だけ会うことのできる父親が帰った後で、父親の帽子と散歩用ステッキを手に、父親の動作を真似して「父さん、父さん」と言いながら部屋を歩き回ったというエピソードを描写している。この男児の延滞模倣は、彼の、父親に感心したり、父親のようになりたいという願いがもとになったと解釈される（スピッツ、1972）。

スピッツ (1972) は、模倣の始まりは、思考過程の始まりでもあるため、このような親子関係を剥奪される子どもは、話すことも考えることも身につけることができないと臨床経験と重ねて記述している。

子どもが模倣をし始めるのは、周囲の人たちへの信頼や親密な感情、あるいは、同じことを行いたいという願望などの内的な状態が基底にあるといえるであろう。

自閉スペクトラム症 (ASD) の子どもの場合、視線の合わなさや、情動の共有が難しいことに加え、模倣が現れにくいことが指摘されている。山上 (2012) は、ASD の幼児 2 人の療育場面における事例として、養育者とのアタッチメント関係が形成されるのと並行して、情動の表出が分化し、母親や療育担当者の動作を模倣することや、言葉が現れる様子を示している。この事例からも、養育者とのアタッチメントが形成され、養育者を安全基地として外の世界への興味や関心が広がる中で、共同注意や模倣、さらには言語の獲得につながる事がわかる。

それではなぜ、アタッチメント関係の中で生まれる他者への親密な情動が、模倣と関連するのであるのか。この点について脳科学的には以下のように説明可能である (乾, 2018)。

脳の下前頭回の領域に、他者の行動を観察すると、自身は行動をしていないにもかかわらず、反応するミラーニューロンとよばれる特殊なニューロンの存在が想定されている。他者の行動を見ると、それに対応した、見ている人のミラーニューロンが働く。したがって、その活動をそのまま実行することで模倣となる。また、ミラーニューロンを含む、上側頭溝などの部位の相互結合は like-me システムとされる。このシステムによって、観察した他者の行動から、その人の行動の意図や感情を読み取ることが可能になる。ミラーニューロンがある下前頭回は島という部位を介して、情動喚起に関わる扁桃体とつながっている。この仕組みによって、例えば、他者が手をドアに挟んでしまった様子を見ると、見ている側にも痛みを感じるという、他者の感情への共感も説明できる。

このように、他者を模倣することで、その人の感情や意図などの内的情動を体験し、共感することで親密な感情も生まれると考えられる。

## まとめ

人間が持つ表象機能が、どのように発生するのか、生得的に備わるものなのかは、ピアジェとワロン、あるいはベイラージョンの議論に代表されるように、発達心理学では長い間続く大きな問いである。また、現在でも明確に解明されていない (木下, 2011)。

その要因の一つが、「表象」の概念の広さであろう。前述した、パーナーの分類に従えば、生後数か月の時期にもその存在が示唆される、ベイラージョンらや still face 実験の結果で示されるものは一次表象であり、一種の記憶痕跡に近いものと考えられる。二次表象が形成さ



れる1歳半前後に延滞模倣が現れることから、この時期に、ピアジェの指摘する、真の心的表象が可能となる。人間独自の本来の表象機能は、この二次表象に相当することは前述した。

しかしパーナーの分類では、1歳半頃までが一次表象とされており、共同注意がはじまる生後9か月前後という境界が存在しないため、パーナーの一次表象という区分も広すぎることになる。

スターンの理論によれば、この一次表象前半（生後9か月以前）の時期には、養育者との一対一の関係の中で、情動や意図をやり取りしながら、乳児は自己や他者の表象を作る。日々の生活の中で、養育者は、乳児の行動や表情に、乳児の意図や情動を読み取り、それを言語化、つまり代弁を頻繁に行う（岡本他、2014）。また、乳児の身体発達の状態に合わせて、乳児に対象物を提示することで、乳児と対象物を共に見ることを支える（常田、2007）。この時養育者は、単に対象物を提示するわけではなく、スターンが指摘するように、乳児の興味を引くようにと、対象物を擬人化しながら、見せ、動かし、触らせる関わりをする。このような一次表象前半の時期の養育者—乳児間のやり取りが、次の一次表象後半（生後9か月以降1歳半頃まで）に始まる、意図や情動の共有という飛躍的な変化へにつながる土台となるはずである。そこでは、養育者が、乳児の行動のトーンに合わせる情動調律を行うことで、乳児は自身の情動や意図の理解をより明確にしていく。

一次表象の段階では、信頼する他者を見ることや模倣すること、あるいは他者とともにモノを見て、それについて意味や情動を共有することで、子どもは表象をより高次なものへと発達させることになる。

木下ら（2011）は、2歳児以降の幼児期の表象を取り上げ、その「ゆらぎ」をキーワードに、子ども達の心的世界のおもしろさを描写しつつ、さまざまな乳児実験からもたらされる「有能な乳児」観の一人歩きを警告している。彼らは、ワロンの理論をもとに、表象を生得的に備わるものではなく、知覚残像や感覚運動など身体的システムとはレベルの異なる、対立し合うものとして捉えている。この点について筆者は、本稿で記述した、近年の乳児研究や脳科学的知見に基づき、誕生間もない時期から、一次表象として原初的な表象は備わっていると考えるため疑問を抱く。表象は身体や情動と対立して、生後2年目後半以降に現れるものではなく、当初からあるものとして捉えなければ、ワロンがピアジェを批判したように、運動や姿勢という身体システムから、どのように表象が分化されたのかは説明できないことになる。

一方で木下ら（2011）の、表象発生には、周囲の環境や他者と関わり合ううえで重要な役割をする情動も含めた身体的システムが必要な条件であるとする考えには筆者も納得できる。誕生時から備わる表象は、人間特有の真の表象とはいえないが、養育者をはじめとする

他者との情動的関わりを重ねることによって、次第にその輪郭は明確になり、内容も高次化していくと考えられる。

表象が生後二年目半頃になってはじめて現れるものではないとするならば、養育者との一対一の情動的やり取りの時期を経て、共同注意の時期を含む生後一年目の乳児期にも既に、表象を育てていることになる。認知や言語発達と関連する表象が、情動的に豊かな親子関係と関連するという視点は、乳児期の親子支援において有益であろう。

### 引用文献

- 足立自朗 (1996) ピアジェーワロン論等とは何か. *ピアジェ×ワロン論争：発達するとはどういうことか* (pp.1-11). ミネルヴァ書房
- 相原正男 (2016) 社会脳の成長と発達. *認知神経科学*, 18, 101-107.
- Baillargeon, R. & Graber, M. (1987) Where's the rabbit? 5.5-month-old infants' representation of the height of a hidden object. *Cognitive Development*, 2, 375-392.
- Bertin, E. & Striano, T. (2006) The still face response in newborn, 1.5-, and 3-month-old infants. *Infant and Child Development*, 29, 294-297.
- Bushnell, I. W. R. (2001) Mother's face recognition in newborn infants: Learning and memory. *Infant and Child Development*, 10, 67-74.
- 乾敏郎 (2018) 感情とはそもそも何なのか. ミネルヴァ書房
- 加藤義信 (1996) ワロン『行為から思考へ』におけるピアジェ批判. *ピアジェ×ワロン論争：発達するとはどういうことか* (pp.49-71). ミネルヴァ書房
- 加藤義信 (2007) 発達の連続性 vs. 非連続性の議論からみた表象発生問題. *心理科学*, 27, 43-58.
- 木下孝司 (2011) 子どもの「不思議」から見た「発達の謎」. *子どもの心的世界のゆらぎと発達* (pp.197-205). ミネルヴァ書房.
- 子安増生 (1997) 幼児の「心の理論」の発達. *心理学評論*, 40, 97-109.
- 岡本依子・菅野幸恵・東海林麗香・高橋千枝・八木下暁子・青木弥生・石川あゆち・亀井美弥子・川田学・須田治 (2014) 親はどのように乳児とコミュニケーションするか：前言語期の親子コミュニケーションにおける代弁の機能. *発達心理学研究*, 25, 23-37.
- Piaget, J. (1978) *知能の誕生* (谷村覚・浜田寿美男訳) ミネルヴァ書房. (Piaget, J. (1936). *La naissance de l'intelligence chez l'enfant.*)
- Spitz, R. A. (2013) 基礎教育—発達モデルとしての対象関係—. (森林監訳) *遊びと発達の心理学*. 黎明書房. In M. W. Piers (Ed.), 1972, *Play and Development*
- Stern, D. N. (1989) *乳児の対人世界：理論編*. (小此木圭吾・丸田俊彦監訳) 岩崎学術出版社 (Stern, D. N. (1985) *The interpersonal world of the infant: A view from psychoanalysis and developmental psychology.*)
- 常田美穂 (2007) 乳児期の共同注意の発達における母親の支持的行動の役割. *発達心理学研究*, 18, 97-108.
- 浦川将・坂井奈津子・高木考一・堀悦郎・石川亮宏・小野武年・西条寿夫 (2011) 乳児の認知機能発達：目と目を合わせることの重要性を脳科学により検証する. *東海北陸理学療法学会論文集*
- Wallon, H. (1983) 情緒的關係：情動について. (浜田寿美男訳編) *ワロン・身体・自我・社会*. ミネルヴァ書房 (Wallon, H. (1938) *Rapports affectifs: les emotions.*)
- Werner, H. & Kaplan, B (1974) *シンボルの形成：言葉と表現の有機・発達論的アプローチ* (柿崎祐一監訳) ミネルヴァ書房. (Werner, H. & Kaplan, B (1963). *Symbol formation: An organismic developmental approach to language and the expression of thought.*)
- 山上雅子 (2012) 育つということ：発達臨床のフィールドから第8回 自閉症児の関係性と情動行動. *発達* Vol.33. (pp.113-118). ミネルヴァ書房

## Research Notes

## The Development of Representation: The relevance of emotional relationships with others

KANAMARU, Tomomi

This article gives an overview about the representation function growing in the emotional relationship with others from the first year of life. First, it describes a review of the definition and the development level of the representation, and the theory about the representation of Piaget and Wallon. In addition, in Stern's theory of the infant's sense of self, it focuses on the representation and emotional relationship with others. Finally, as an action related to the development of the representation, looking and imitating is considered.

From the first year of life, including the start of joint attention, infants have a primitive representation, which suggests that it is grown up in emotional relationships with others, and presents an important perspective on child-rearing support at this time.